

令和4年度 全国学力・学習状況調査 横浜市の結果

令和4年4月19日に横浜市立小学校6年生（約2万8千人）、中学校3年生（約2万4千人）を対象に実施された全国学力・学習状況調査の各教科に関する結果と学校質問紙に関する結果の概要をお知らせします。

◎ 各教科の調査結果から見る横浜市の状況

- ・ 調査結果においては、全国の平均正答率と比べ、国語は同等、算数・数学、理科は高い状況です。
- ・ 小学校の算数、中学校の数学において、全国の平均正答率に比べ、3ポイント高い状況が見られました。
- ・ 小学校の理科、中学校の理科において、全国の平均正答率に比べ、2ポイント高い状況が見られました。

【平均正答率（%）】

	小学校			中学校		
	国語	算数	理科	国語	数学	理科
横浜市	66	66	65	70	54	51
全国との差	±0	+3	+2	+1	+3	+2
神奈川県	65	64	63	69	53	50
全国	66	63	63	69	51	49

※ 全国の平均正答率については、文部科学省の指示のもと整数値に直して表しています。

※ 横浜市、神奈川県、全国の値は、公立学校の平均正答率です。

◎ 各教科で顕著な結果が見られた設問

全国の平均正答率との差が4ポイント以上あった設問の中で、最大のものを表記しています。

【小学校】

算数

- ・ 「示された場面において、目的に合った数の処理の仕方を考察できる」が5ポイント高い。

理科

- ・ 「自分で発想した予想と、実験の結果を基に、問題に対するまとめを検討して、改善し、自分の考えをもつことができる」が4ポイント高い。

国語

- ・ 「表現の効果を考える」が6ポイント高い。「学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う」が5ポイント低い。

【中学校】

数学

- ・ 「一次関数の変化の割合の意味を理解している」が6ポイント高い。

理科

- ・ 「予想や仮説と異なる結果が出る場合について、結果の意味を考え、観察、実験の操作や条件の制御などの探究の方法について検討し、探究の過程の見通しをもつことができるかどうかをみる」が5ポイント高い。

国語

- ・ 「論理の展開などに注意して聞く」が4ポイント高い。

◎ 学校質問紙の結果も踏まえた分析

- ・ 各教科の調査結果が全国の平均正答率と比べ、高いか、同等の状況となったのは、各学校が「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組んできた成果だと考えられます。また、学校質問紙の「前年度に教科担任制を実施していましたか」の質問に、「実施した」と回答した学校数の割合が、小学校の算数では全国の15%に対して横浜市は32%と17ポイント高く、小学校の理科では全国の54%に対して横浜市は67%と13ポイント高い結果です。平成30年度から取り組んできた教科分担制を伴う「チーム学年経営」や平成30年度に全校配置した理科支援員の効果が、今年度の理科、数学の平均正答率に表れてきていると考えられます。
- ・ 学校質問紙の「教職員と児童生徒がやりとりする場面では、一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか」の質問に、「ほぼ毎日」と回答した学校数の割合が、小学校では全国の23%に対して横浜市は31%と8ポイント高く、中学校では全国の22%に対して横浜市は19%と3ポイント低くなっています。今後は、中学校での活用を進めていくことが課題です。

お問合せ先

教育委員会事務局教育課程推進室長 山本 朝彦 Tel 045-671-3723